「あなた」の哲学

村瀬 学

講談社現代新書

2032

「あなた」の哲学

村瀬 学

常州大学図書館
藏书章

講談社現代新書
2032

N.D.C.143 238p 18cm
ISBN978-4-06-288032-9

講談社現代新書 2032
「あなた」の哲学
二〇一〇年一月二〇日第一刷発行

著　者　村瀬学　© Manabu Murase 2010
発行者　鈴木哲
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電　話　出版部　〇三―五三九五―三五二一
販売部　〇三―五三九五―五八一七
業務部　〇三―五三九五―三六一五

装幀者　中島英樹
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価はカバーに表示してあります　Printed in Japan

R〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。

■目次

序章　「あなた」と「他者」　7

第一章　〝三世代存在〟としての「あなた」　17

1　ある違和感――上野千鶴子『おひとりさまの老後』を読んで　18
2　「あなた」を見つける――森崎和江の軌跡　26
3　存在の三重性　41
4　「すがた」への敬意　54
5　『ツァラトゥストラ』における「あなた」　62

第二章　「人称」の世界へ　73

1　「あなた」は単なる二人称なのか　74
2　日本語の「人称」　82

3 『坊っちゃん』を読みなおすと 90
4 「格付け」のなかで 100
5 こころの傷と「あなた」 108

第三章 **飢えと老いのなかの「あなた」** 121
1 千二百年の時空を超えて 122
2 『池袋・母子　餓死日記』考 136
3 「そうかもしれない」の光景 153
4 「小さな神さま」の発見 164

第四章 **ブーバー、レヴィナス、そして西田** 177
1 『我と汝』をめぐって――「汝」はなぜ「あなた」と訳されないのか 178
2 レヴィナスのブーバー批判 188

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3　「きみ」と「あなた」のあいだ　196
4　西田幾多郎の「私と汝」　204

終章
「あなた」の方へ　219
あとがき　234

「あなた」の哲学

村瀬 学

講談社現代新書
2032

■目次

序章　「あなた」と「他者」　7

第一章　〝三世代存在〟としての「あなた」　17

1　ある違和感――上野千鶴子『おひとりさまの老後』を読んで　18
2　「あなた」を見つける――森崎和江の軌跡　26
3　存在の三重性　41
4　「すがた」への敬意　54
5　『ツァラトゥストラ』における「あなた」　62

第二章　「人称」の世界へ　73

1　「あなた」は単なる二人称なのか　74
2　日本語の「人称」　82

3 『坊っちゃん』を読みなおすと 90
4 「格付け」のなかで 100
5 こころの傷と「あなた」 108

第三章 **飢えと老いのなかの「あなた」** 121
1 千二百年の時空を超えて 122
2 『池袋・母子　餓死日記』考 136
3 「そうかもしれない」の光景 153
4 「小さな神さま」の発見 164

第四章 **ブーバー、レヴィナス、そして西田** 177
1 『我と汝』をめぐって――「汝」はなぜ「あなた」と訳されないのか 178
2 レヴィナスのブーバー批判 188

3　「きみ」と「あなた」のあいだ　196
4　西田幾多郎の「私と汝」　204

終章　「あなた」の方へ　219

あとがき　234

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章　「あなた」と「他者」

歌謡曲は「あなた」を歌い、哲学は「他者」を論じてきた

明治以来、日本の哲学や思想の世界で「あなた」という言葉が主題として使われることは、まずなかった。

その一方で歌謡曲（とくに戦後）の世界では「あなた」という言葉が山ほど使われ歌われてきた。たとえば、矢吹健の歌う『あなたのブルース』（一九六八年）では、

〜あなた　あなた　あなた　あーなた　あー　私のあなた

と「あなた」が連呼されていた。

また、

〜あなたを待てば　雨が降る（フランク永井『有楽町で逢いましょう』一九五七年）
〜あなた　変りはないですか（都はるみ『北の宿から』一九七五年）

といった歌い出しを口ずさめない人はいなかったようにも思う。

歌謡曲は世間の人情を歌うものだから「あなた」を歌い上げるのはあたりまえで、哲学ではもっと高級な思想や倫理や政治の世界を扱うのだから、そんな色恋じみた「あなた」というようなものは相手にしないのだ、とでもいうこともできそうだ（歌謡曲の世界を「気持ち悪い」と感じていた知識人もたくさんいただろう）。

もちろん歌謡曲の世界と哲学の世界を「比べる」こと自体まちがっているのかもしれない。でも私は、なぜ？　と思う。なぜ、ふだんの暮らしで使う「あなた」という言葉が、哲学の世界ではまったく考察されてこなかったのかと。哲学の本の題名で「あなた」が使われることはなかったことは大目に見るとしても、個々の哲学の論文の題目で「あなた」を取り上げる人もいなかったというのは、いったいどう考えればよかったのだろうか。

その代わりというべきか、歌謡曲での「あなた」に匹敵するくらいに哲学で使われてきたのが「わたし」であり「他者」だった。とくに「他者」ということばは、「あなた」と言えばいいところで、ひんぱんにもち出され使われてきた。

歌謡曲は「あなた」を歌い、哲学は「他者」を論じてきた、と言えるかもしれない。あるいは、大衆は「あなた」を歌い、知識人は「他者」を論じてきた、と言えばいいのか。

うさんくさい言葉

しかし、「あなた」という言葉が、ふだんの日常生活ではなんの不自由もなく使われる言葉であるのに対し、「他者」という言葉は、ふだんの暮らしのなかでは、ほとんど使うことはできない。むしろうさんくさい言葉ですらある。

たとえば、コンビニで店員さんに、

「さっき出ていった他者が、このカード、落としていかれましたよ」

とレジまでもってゆけば、店員さんは「タシャ？」と聞き返してくるに決まっている。「タシャ」は、世間の人びとの感覚のなかでは、人を呼ぶ「人称（人称代名詞を含む）」とは認知されていない。にもかかわらず、アカデミズムの世界では、「他者」という用語は大流行し、まるで日常語のように、なんのためらいもなく多くの著作や論文のタイトルにつけられてきた。たとえば、こんなふうに（あくまで思いつくままに挙げたものである）。

他者の言語／他者の記号学／他者の現象学／実存と他者／他者へのまなざし／他者の

ような自己自身／他者なき思想／他者といる技法／時間と他者／他者との遭遇／他者の耳／他者の受容／他者の風景／他者を負わされた自我知／他者の苦痛へのまなざし／他者論序説／他者と共同体／他者と私／他者としての忘却／他者への旅

だが、この言葉はつねにいつの時点でも、アカデミズムの世界にしか通用しない「業界用語」としてのみ、ありつづけてきたのである。

いったいいつから、誰が、こういう「用語」を流行らせてきたのだろうか……。

流行の理由

考えられることは、いくつかある。

近代に入って、「わたし」や「主体」に力を入れて考える「実存主義」のような思想と、「貧者」や「弱者」のことを考えようとする「マルクス主義」のような考えかたが生まれてきた経過があり、そんななか、第二次世界大戦の大きな不安のなかでは「実存」の思想が優勢になっていた。しかし、戦後はふたたび、「搾取」や「疎外される人間」「植民地化される人間」のことが主題になりだし、ヨーロッパ中心の人間学に対して、そこからはずされてきた人びとを「他者」と呼びなおして主題化する思想が生まれていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com